

# 第25号 華山会報

平成22年10月11日

財団法人華山会

## 渡辺華山とあいみつ 靨光と

愛知県美術館長 牧野 研一郎



愛知県美術館では本年六月四日から七月十一日まで一カ月あまりの期間、田原市博物館の全面的な協力のもとに「田原市博物館の名品による渡辺華山展」を開催いたしました。

渡辺華山の資料の収蔵において全国随一の規模を誇る田原市博物館のコレクションから絵画作品を中心に重要文化財8件を含む37件を一堂に展示したこの展覧会は、小規模ながら、華山の足跡や多様な画業を知ることができ大変充実した内容であったと思います。

ただ急に開催が決まったことであって、十分な予算的措置がとれず、図録の制作ができなかつたり、広報面において不十分なところがあったことは残念でした。それでも美術館のホームページなどで知ったのでしようが、かなり遠方の人からの問い合わせも多く、また会期中に開催した記念講演会にも多くの聴衆が集まるなど人々の華山への関心の高さをあらためて感じさせられました。記念講演会は田原市博物館学芸員の鈴木昌良氏を講師にお迎えし、「渡辺華山の絵画と生涯」と題してお話していただきましたが、その懇切丁寧で的確な話しぶりは聴衆を魅了していたように思います。この講演を聞きながら、一方で私は吉澤忠先生のことを思い出していました。先生は戦時下の昭和十七年に『国華』に発表した「南画と文人画」以後、南画の体系的的研究に取り組まれ、多くの業績を残されたことは周知のところですが、単行図書として最初に上梓されたのは日本美術史叢書中の一巻『渡辺華山』(昭和二十一年)でした。また田原塾居中に制作された作品については「華山の矛盾 特になその線描について」(『美術史9』昭和二十八年)で、華山の思想と絵画との問題を鋭く論じています。先生は戦前、戦中、戦後という動乱の時代に美術史研究者として青壮年期を送るなかで、絵画も思想であるという強い確信を抱き、画家の生き方と絵画との関連を追求する一連の論考を発表しましたが、華山はその格好の研究対象であったと思われまふ。先生はながく『国華』の編輯委員を務められ、また大学で教鞭を執られました。実は私の卒業論文の指導教官は、その年を最後に退官されることになっていた吉澤先生でした。世間的には先生の最後の不肖の弟子ということになります。ただ私は田能村竹田の「山中入饒舌」の講読のゼミには参加していましたが、南画を専攻しようなどという身の程知らずな野望を抱くことはありませんでした。そのゼミでは、今日の大学教育では想像もできませんが、先生が出来る悪い学生に白墨を投げつけるという光景がよく見られたものでした。大学では四回生になると、壇上に一列に並んだ教官の前で学生が卒業論文のテーマを発表し、そこで指導教官が決まるのですが、私がテーマに選んだのは近代の洋画家・靨光でした。当時、大学には近代絵画史を専門にする教官などいませんでしたから、誰が指導教官となるのか皆目わかりませんでした。ことによるとテーマを替えるよう言われるかもしれないと思っていました。私が「靨光」と言うと、他の教官が「それは吉澤さんだ」と直ぐに言われ、先生も肯かたで、あつけない指導教官となつたのです。私は知らなかつたのですが、実は吉澤先生が近代の画家の中で最も高く評価していたのが靨光でした。真摯に時代と対峙し、それを絵画表現に高めていった靨光の作品は、確かに「画も思想である」という先生の目に適うものであるといえましよう。先生は靨光の未亡人や、井上長三郎氏、難波田龍起氏など靨光の周辺の画家、あるいは現代画廊の洲之内徹氏、宮川寅雄氏などのコレクターに紹介状を書いてくださるなど、この上なく親切な指導をしていただいたのだと今更ながら思います。華山展を機にそんなことを思い出しました。



田原城跡

## 渡邊巨祥氏の思い出

華山・史学研究会の会長で、企画の段階からこの『華山会報』の編集に携わられた故渡邊巨祥氏が、二〇一〇年（平成二十二年）七月二十七日、食道癌によりご逝去されました。

渡邊氏は、一九三七年（昭和十二年）一月二日に田原町築出（現田原市田原町）に生まれ、愛知県立成章高等学校普通科、金沢大学法文学部法学科を卒業後、母校である成章高等学校に奉職されました。その後、成章高等学校教頭、愛知県立豊橋商業高等学校校長を歴任されました。

在職中から渡邊華山や田原藩の藩校成章館について興味を持たれ、一九八三年（昭和五八年）には財団法人華山会理事であった故小澤耕一氏を編集委員長に戴いて『成章八十年史』の編集長を務められました。

また、一九八九年（平成元年）にはその前年に財団法人となった華山会の中に、華山・史学研究会を発足させ初代会長となりました。その後、一九九六年（平成八年）からは華山会の評議員を務められています。

渡邊氏は、ご自身を中心に企画され、

フォーマットを考案されたこの『華山会報』を大切にされており、一九九八年（平成一〇年）一〇月二日に発行された創刊号から、大変多くの論考を寄稿されています。以後、その内容を列挙します（カッコ内は発行日）。

- 創刊号（平成一〇年一〇月二日）
- 「紀行文 参海雑志 前編」
- 第2号（平成一一年三月二日）
- 「紀行文 参海雑志 後編」
- 第5号（平成一二年一〇月二日）
- 「華山史跡紹介 龍泉寺（熊谷市） 埼玉県熊谷市三ヶ尻」
- 第7号（平成一三年一〇月二日）
- 「華山・史学研究会だより 華山の書」
- 第8号（平成一四年四月二日）
- 「華山・史学研究会だより 華山の書」
- 第10号（平成一五年四月二日）
- 「第九番（合唱）と『四州真景』のスケッチ」
- 第12号（平成一六年四月二日）
- 「駄舌小記」・「駄舌或問」
- 第13号（平成一六年一〇月二日）
- 「駄舌小記」・「駄舌或問」
- 第14号（平成一七年四月二日）
- 「駄舌小記」・「駄舌或問」
- 第15号（平成一七年一〇月二日）

「駄舌小記」・「駄舌或問」

第16号（平成一八年四月二日）

「駄舌小記」・「駄舌或問」

第17号（平成一八年一〇月二日）

「外国事情書」

第18号（平成一九年四月二日）

「渡邊華山」外国事情書

第19号（平成一九年一〇月二日）

「渡邊華山」外国事情書

第20号（平成二〇年四月二日）

「渡邊華山」外国事情書

第21号（平成二〇年一〇月二日）

「渡邊華山」外国事情書

第22号（平成二二年四月二日）

「渡邊華山」外国事情書

第23号（平成二二年一〇月二日）

「渡邊華山」外国事情書（最終回）

以上の通りです。この『華山会報』は今回が第25号となり、これまで多くの方々が寄稿されていますが、その中で、渡邊氏が執筆された分量が最も多くを占めています。

渡邊氏はおよそ二年間闘病されたと聞きます。最後に連載された「外国事情書」の寄稿はその期間と重なります。最終回の最後には、幼少の頃から遊ばれ、長く勤務された成章高等学校の隣にある、池ノ原公園の渡邊華山の銅像の写真で締め括られています。

## 目次

題字「華山会報」元華山会理事	故小澤耕一氏
P	渡邊華山と巖光と 牧野研一郎
P	渡邊巨祥氏の思い出 目次
P	画家渡邊華山の心象 『林述斎肖像稿』
P	渡邊華山『毛武游記』 博物館収蔵品から
P	渡邊華山筆 『客坐掌記（天保九年）』
P	華山の田原行（九） 研修視察 後編
P	田原市博物館 渥美郷土資料館 から案内
P	財団法人華山会 田原市博物館 から案内

画家渡辺華山の肖像

林述齋肖像稿

天保年間（一八三十年代後半）

紙本墨画淡彩

縦一五六・五cm横八七・六cm

田原市博物館蔵

林述齋（一七六八〜一八四二）は名を衡（たいら）といい、美濃国岩村藩主松平乘蘊（のりもり）の子で、和漢の典籍に通じ、寛政五年（一七九三）に二十六歳で幕府の命によって林家を継いだ。林家の私塾であった湯島の聖堂を幕府の学問所「昌平黌」とした。松崎慊堂・佐藤一斎を擁し、学徒の養成に努め、林家の中興と称された。この肖像では鬢に白髪が混じり、林家の紋をつけ、ふくよかなその姿は六十歳代と思われる。述齋の肖像画は伝谷文晁をはじめ数点が知られている。華山は文政年間に松崎慊堂（関東大震災で焼

失）・佐藤一斎の肖像画を描いている。この林述齋肖像稿も依頼画の下書きと考えられるものであるが、天保十年五月に蚕社の獄で華山が捕えられた際、『慊堂日曆』同年五月二十八日の条によれば、「林門八華山ノ籍ヲケズルコトヲ命ズ」とあり、完成画も廃棄されたのかもしれない。光がある顔の正面には明るい肌色を使用し、顔の側面と首にやや濃い色を塗ることにより、立体感を描き出す。華山が西洋画から取り入れた陰影技法が駆使されている。正面を見据えたその眼差しは、大名家出身の学者であり、そのゆるぎない自信と剛直な性格を充分に表現している。この作品は、慶



應義塾学長も務めた小泉信三（一八八八〜一九六六）の旧蔵で、箱書は帝展委員の田中頼璋（一八六八〜一九四〇）が大正二年（一九一三）に書いている。昭和二十五年（一九五〇）東京国立博物館の南画名作展に

松林桂月の推選により出品されたとされるが、残念ながら目録には掲載されていない。一時タイ国に持ち出されたが、幸いに日本へ持ち帰られた。

田原市博物館学芸員 鈴木利昌

渡辺華山『毛武遊記』②

研究会員 加藤克己



志村一里塚

国指定史跡 東京都板橋区志村一丁目

(都営地下鉄三田線志村坂上駅前)

華山は、志村で生田万と出会った。

又曰、太古自有<sup>ニ</sup>国字<sup>一</sup>、後世失<sup>フ</sup>其伝<sup>ヲ</sup>。契沖、真淵、宣長之徒疑<sup>ヒ</sup>之<sup>ヲ</sup>、至<sup>リ</sup>平田篤胤<sup>ニ</sup>、甚信<sup>ス</sup>。終分<sup>ニ</sup>為<sup>ス</sup>二十三体<sup>ト</sup>。一字一音如<sup>ク</sup>今<sup>ノ</sup>仮字<sup>ニ</sup>。其証則出雲大社所<sup>レ</sup>藏<sup>ル</sup>竹簡漆書<sup>ニ</sup>、皆可<sup>レ</sup>読<sup>ム</sup>。或鶴岡八幡神宝所<sup>レ</sup>収<sup>ル</sup>伝写本<sup>ニ</sup>、洛法隆寺所<sup>レ</sup>伝写本<sup>ニ</sup>、老岐鬼窟所<sup>レ</sup>刻<sup>ル</sup>神字<sup>ニ</sup>、越後弥彦神社上宮太子所<sup>レ</sup>納<sup>ル</sup>神字訓詁本<sup>ニ</sup>云<sup>フ</sup>。

また(生田万が)言つことに、大昔(漢字が伝わる以前)から国字があったが、後の世に、その伝えを失った。契沖(賀茂)真淵(本居)宣長らの仲間はこれ(国字があったこと)を疑ったが、平田篤胤に至つてたいへん信じた。ついに分析して十三体(の神代文字)を見つけた。一字一音で今の仮名のようなのである。その証拠はすなわち、出雲大社の所蔵する竹簡漆書であり、皆読むことができる。あるいは鶴岡八幡宮の神宝所収と伝わる写本、都(?)の法隆寺に伝わる所の写本、老岐の鬼窟に刻まれた神字、越後の弥彦神社の上宮太子(聖徳太子=厩戸王)の納めた神字訓詁本をいう。

生田万 一八〇一 三七 上州(群馬県)館林の人。平田篤胤の門弟で、藩政改革を求め意見書を館林藩主に提出して追放される。天保七年(一八三六)越後柏崎(新潟県柏崎市)へ行き、私塾を開くが、同年の大飢饉や柏崎の代官・豪商の不正があったため、

翌年、大塩の乱に呼応して、柏崎で陣屋襲撃を決行したが、失敗して自殺した。  
国字 神代文字。日本で、漢字渡来以前に古くから用いられていたとされる文字。古来神道家などの間にその存在が信じられてきたが、現在ではすべて後世の偽作とされる。江戸後期には、平田篤胤の「神字日文伝」(存存在説)、伴信友の「仮字本末」(否定説)その他の論争があった。篤胤が最も確実だと主張した「日文」は、ハンブルの影響下にあることが明白であつて、今日では全く否定されている。

契沖 一六四〇 一七〇一。江戸前期の国学者、僧侶。実証的な文献学的方法を確立し、近世国学発展の礎石を築いた。『万葉集』など古典の研究を行い、『万葉代匠記』などの著書がある。

賀茂真淵 一六九七 一七六九。江戸中期の国学者、歌人。日本古代精神(古道。儒教・仏教の影響を受けない純粹な日本固有の道)の復活を主張。古典の文献学的研究をし、『万葉考』、『国意考』などを著す。

本居宣長 一七三〇 一八〇一。江戸中期の国学者。伊勢(三重県)松坂の医者。古典の文献学的研究によって古道を体系付け、国学を大成。ものあわれ論で『源氏物語』を評価した。また、『古事記伝』を著し、漢心(からこころ)である儒教を排し、日本古来の精神「真心(まごころ)」に返ることを主張。

平田篤胤 一七七六—一八四三。江戸後期の国学者。復古神道を体系化。宣長の後継者を以つて自認したが、その文献学は継承せず、国粹主義・排外主義の傾向が強く、幕末の尊王攘夷運動に影響を与えた。

十三体 平田篤胤は、『古史徵開題記』及び『神字日文伝』に、出雲大社、鹿島神宮、大神（大三輪）神社などに伝えられる十三体の神代文字遺文を紹介している。

出雲大社 島根県出雲市。出雲国一ノ宮。大国主神を祭る。大社造の本殿は古代建築様式を伝えている。

鶴岡八幡宮 神奈川県鎌倉市。康平六年（一〇六三）、源頼義が山城国石清水八幡宮を鎌倉由比郷に勧進。応神天皇・比売神・神功皇后を祭る。治承四年（一一八〇）、源頼朝が現在地に移す。以来、源氏の守護神として尊崇を受けた。

法隆寺 七世紀初めに大和（奈良県）斑鳩に聖徳太子が建立した寺院。八世紀初めに再建されたものが現存。斑鳩は都になったことはないが、畿内なので「洛」とつけたか。

壹岐鬼窟所刻神字 長崎県の生池城古墳（吉岐郡勝本町百合畑）の鬼が書いたといふ文字。

越後弥彦神社 新潟県西蒲原郡弥彦村弥彦。天香児山命を祭る。中世には越後一宮とされた。

蕨駅、北根岸、白旗（幡）、此辺有坂、やき米を売岸、一里半

をもて名あり。

蕨駅（武蔵国足立郡、中山道宿駅、埼玉県蕨市）、北は根岸（武蔵国足立郡根岸村、さいたま市南区白幡）、岸（武蔵国足立郡岸村、さいたま市浦和区岸町）、一里半（約六キロメートル。実際は蕨から約三キロメートル）、このあたりに坂があり、焼き米を売ることからその名がついた。

駅 主要街道に置かれ、公用のために人馬を用意した。次第に民間の宿泊施設なども整つ。江戸幕府での正式名称は「宿」だが、駅・宿駅・伝馬宿・馬継などともいわれた。宿の機能は運輸・通信・休泊を主とする。

やき米：名あり さいたま市南区根岸。蕨から浦和へ行く途中、さいたま市立南浦和小学校の東側に、「焼米坂」と呼ばれる一六〇メートルほどの坂がある。正式名称は「浦和坂」。江戸時代、「新名物やき米」の看板を掲げ、中山道を通る旅人に炒つた米を売る茶店が何軒かあった。焼き米は茶づけや、携帯できることから、道中で一時の空腹しのぎとして貴重であり、いつの間にか「焼米坂」といふ呼び名が定着した。

浦和駅、駅の南に月よみの社あり。額に調神社とかけり。寺を月山寺といふ。粟倉院といふ庵室あり。御朱印地といふもの七石（針谷村、落合、一里十丁、大宮八幡のやしろ、是、武州一の宮、神は氷川大明神、松のはやし道をつゝみて、天もわかた

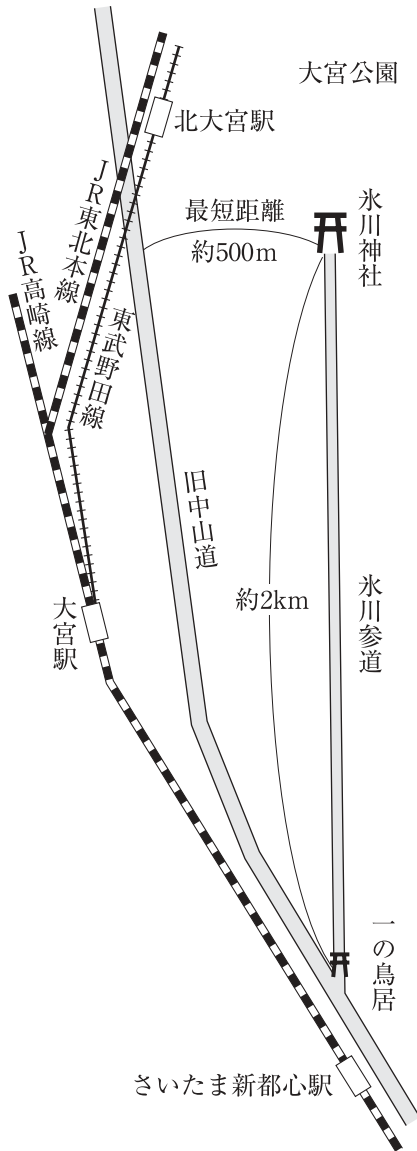
ぬほど黒つしげり、宮居迄凡十八町あなるとぞ。神主角田大隅守、叔父君之伝書ありてかねて一夜をからんと頼こせど、さきいそげ八見過す。

浦和駅（武蔵国足立郡、中山道宿駅、さいたま市浦和区）、駅の南に月よみの社がある。額に「調神社」と書いてある。寺を月山寺という。粟倉院という庵室がある。幕府から朱印状で所領を確認された土地が七石、針谷村（武蔵国足立郡針ヶ谷村、浦和区針ヶ谷町）、落合（武蔵国足立郡落合村、さいたま市中央区上・下落合）、天沼（武蔵国足立郡天沼村、さいたま市大宮区天沼町）、一里十丁（約五キロメートル）、大宮（武蔵国足立郡、中山道宿駅、大宮区）八幡の社、これは武蔵国一の宮、神は氷川大明神、松林の道を包んで、天も見分けられないほど黒く茂り、社殿までおよそ十八町（約二キロメートル）あるということである。神主は角井（角田は間違い）大隅守、叔父君の手紙があつて、かねて一夜を借りたいと頼んでいたが、先を急いでいたので見たまま通り過ぎた。

月よみの社 延喜式内社、調神社。さいたま市浦和区岸町。伊勢神宮へ納める貢（調）物の初穂を納めた倉庫群の中に鎮座していたと伝わる。中世、「調」が「月」と同じ読みから、月待ち信仰と結びつき、江戸時代には月読社とも呼ばれた。日本殿や現在の社殿に月神の使いとされる兔の彫刻があり、狛犬の代わりに兔の石像が境内入り口両側にある。

月山寺 真言宗、調神社の別当寺。明治時代初期の神仏分離令によつて廃寺となり、こ

氷川神社参道



ここにあった勢至菩薩蔵は玉蔵院に移された。月山寺の正確な場所はわからない。  
**武州一の宮** 延喜式内社、氷川神社、さいたま市大宮区高鼻町。大宮の名は、「おおひなる宮居」から名づけられた。須佐之男命・稲田姫命・大己貴命の三座を祭る。出雲大社の祭神を迎えて祭ったといわれ、「八幡の社」というのは間違い。なお、一宮は、平安時代から中世にかけて行われた一種の社格。朝廷または国司が特に指定したのではなく、諸国において由緒の深い神社、または信仰の篤い神社が勢力を有するに至って、おのずから神社の階級的序列が生じ、その首位にあるものが一宮とせられ、以下、二宮、三宮、四宮などの順位をつけた。時代の変遷とともに、一宮が他社に移った国もある。  
**官居迄凡十八町** 氷川参道が旧中山道から分岐する地点（JRさいたま新都心駅前）に一の鳥居がある。すなわち、参道がおよそ十

八町（約二キロメートル）。略地図参照。

生田万と途快談しつゝ行。万云平田氏のひととなりや、人と雑談して日をむなしうするをいとひ、若きより力を著述にこめ、そのはじめくすしなりしかバ、傷寒論考証をあらはし、医事にこころつくされたり。ひととなりてより八漢学百氏の書を見ひらけども、漢魏已上のふみならで八読すとぞ。一切経を通読三度に及しとぞ。されば日本記など考証せんに、その文字の淵源を尋とてなり。故に読とて読にあらず、その熟字等を見出し、それより左右のいミを略識のミにて止む。大凡漢書をよむ、皆左の如し。国学著書にいたりて八其数実に牛にあせずべし。からくにのふミに至りても、又考証せるもの多し。

生田万と道々楽しく話をしながら行く。万が言う平田氏（篤胤）の人柄は、他人と雑談して日を空しくすることを嫌い、若い時から力を著述にこめ、その初めは医者であったので、『傷寒論考証』を著し、医事には心を尽くされた。成人してからは、漢籍についての学問のさまざまな人の書物を見開いてみたけれども、漢代・魏代以前の文でなければ読まないという。一切経を通読すること三度に及んだという。だがそれも、『日本書紀』などを考証するために、その文字の根本を尋ねようとしてのことである。したがって、通読するのはなく、その熟語などを見出して、それにより全体の意味をとらえ、おおよその知識のみで止めておく。おおよそ漢籍を読む場合は、皆、そのよう

である。国字の著書に至ってはその数は牛に汗する(蔵書数が非常に多い)ものである。中国の書物に至っても、また考証するものが多い。

**傷寒論考証** 平田篤胤著。漢方医が金科玉条にしていた後漢の張機著の古医書『傷寒論』を批判したもの。

**一切経** 経蔵・律蔵・論蔵の三蔵およびその注釈書を含めた仏教聖典の総称。大蔵経ともいう。

**日本紀** 『日本書紀』のこと。『日本紀』ともいう。元正天皇の七二〇年に完成。最古の官撰正史。舎人親王ら編纂。神代から持統天皇に至る天皇中心の国家成立史。

易の註、諸家皆あしくとて、連山、帰蔵の深義より十翼、子夏伝、乾鑿度、秦漢唐宋諸儒の説を取捨し、故人未発の易理を見出しけりとぞ。其書八何とかいひし、名をわすれたり。篤たね常客のいたりて雑談せるをいとひ、ミヤび八皆すてゝせずと。適々病などして歌よむ時八一日に式三百首いと気高つ出来るとぞ。

(篤胤は) 易経(儒教の經典で五經の一つ)の注釈は、その道の多くの人々のものが皆悪いといつて、連山(中国古代の夏代の易、三易の一つ)、帰蔵(中国古代の殷代の易、三易の一つ)の深い意味より、十翼(易の注釈書、孔子の作と伝えられる)、子夏伝(子夏は孔門十哲の一人。その評伝のことか)、乾鑿度(『易緯坤鑿度』のことか)、秦漢唐宋の時代の多くの儒者の説を取捨選択し、昔の人のいまだ発見しなかつた易の真理を見出し

たということである。その書は何とかいったが、名を忘れてしまった。篤胤は、いつも来る常連の客が来て雑談するのを嫌い、遊びごとはすべて捨ててしまつて、しないという。たまたま病氣などをして歌を詠む時は、一日に二三首もの歌がたいへん気品が高くできるといふ。

凡一書を著す、其余波をもて二種八出来まゝ、自ら著書之數かく八さわなるなり。常に用ゆる処のおしまつき、左りのひぢつく方窪つなりて、厚木板もつがつばかりなり。

おしなべて一つの書を著すと、その勢いをもつて(さらに)一二種の書が著せるので、おのずから著書の数がこのように多くなるのである。日常使つてゐるところの肘掛は、左の肘をつく方がくぼんでしまつて、厚い板も穴があくほどになっている。

折々ひぢいたためて寝る時八、書を取てはなたすとぞ。御年末六十にいたらず。月三たび学び子におしゆ。多く八おのれが説あるものとぞ。

時々肘を痛めて寝込む時は、書物を取つて放さないといふことである。御年は、いまだ六十には至らない。月に三回、弟子に教える。(その内容)多くは自分の説があるものといふ。

上尾この道いと遠して日暮れたり。万に我やどるかたまで来てひとよを語あかさばやと申せし

かど、いとつかれにつかれたればとて、此駅にやどかる。

上尾(武蔵国足立郡 中山道宿駅、上尾市本町)この道はたいへん遠いので日が暮れてしまつた。万に自分が宿泊する所まで行つて一夜を語り明かそうではないかと言つたのだが、(万は)たいへん疲れに疲れてしまつたからといつて、この駅に宿を借りた。

**此駅** 生田万が華山と別れて泊まつた宿駅は、この文から「上尾」のようにも読めるが、日本図書センター版『渡辺華山集』は「浦和」、芳賀徹著『渡辺華山 優しい旅びと』は「大宮」としており、真実は不明。



生田万おもかげかくありし。

生田万のおもかげは、このようであった。

(続)

田原市博物館収蔵品から

渡辺華山筆『客坐掌記(天保九年)』③



\* 建長五年癸丑七月五日金剛佛(仏)  
師湛空\*

(図) 花卉  
\* 道光二年初  
夏五月上澣  
寫(写)於聽香  
書屋

\* 王濡  
之印

建長五年癸丑七月五日……高野山靈宝館の飛行三鈿記録によれば、建長五年(二五三)七月「七日」湛空上人座うて合掌したまま、高山野で往生する、上人より高野山に三鈿杵返納」、……略……「大師の宝物を永く御影堂に納める、ついで、いかに権門勢家よりの嚴命によつても、持ち出しをせしはならない。もし破つた者は冥罰を加ふる、建長五年癸丑七月五日仏師湛空」とある。  
湛空 字正信、法眼円実の子、京都嵯峨、二尊院開祖、建長五年(二五三)寂、行年七十八、画人。(国書人名③ 249)

道光二午 一八二二年  
上澣 上旬  
王濡 未詳



(図) 山水  
\* 憲信筆

憲信畫(画)

眞永

(図) 人馬、杜甫か)

憲信 狩野永真 別号は祐盛、中橋狩野家九代主信の長男で、のち十代を継いで徳川幕府の奥絵師をつとめ、享保十六年(二七三二)没、行年四十。(書画骨董 67 1)

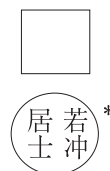


若冲 伊藤若冲（一七二六～一八〇〇）、名春教  
左衛門・茂右衛門、号若冲・斗米、京都錦小路の青物問屋榊源の長男、花鳥画を得意とし、鶏画は有名。  
（国書人名・① 164）



（図）美女

（図）鯉



蛾眉 四川省成都西南の山。  
姜余 未詳



（図）山水

（図）山水）  
蛾眉積雪\*

来禽\*



韓天寿の書

○詩

戊午春三月私坪姜余\*



来禽 大鳥来禽 天明年間の人、京都の人、蘿井氏の女、後に大鳥芙蓉の妻となる、好んで花魚を画く、巧妙にして清人の風趣がある。  
（日本書画骨董）  
韓天寿 一七二七～一七九五。文人、篆刻家。伊勢国松坂の両替業田丸屋の主人。俗称中川長四郎。京都に生まれ、生家は青木氏で青木米の従兄、のち中川氏五代目を継ぐ。（國史大辞典三卷・八八三）

# 華山の田原行（九）

二月十二日

二月十二日  
 登城すると、藩主康直が水川と谷口（いずれも田原市南神戸町）へ行くお供を命じられます。昼食後、三浦舎人ともに出かけます。船倉橋から漆田に到ります。このあたりの様子を、華山は次のように記しています。

「平田、小阜、池、所々にありて後八蔵王、藤生の山々はるかに屏風をたてるごとく一面に見わたされ、景言八んかたなし。池八雨水をたゝえたれど波なくて清し。」

池について、舎人が、「皆雨水なれば早抜の時八土われて水洶。」と言いますが、華山は、日照りの時はそうかもしれないが、鮒や蝦が出るのを見ると、清水の湧き出る池だが、水の湧き量が多くないのでこのようにかれやすくなっていると考えます。

水川村に到着します。

「道の左右小松多し。百姓が立山といえる八大きやかなる松あり、おなじ土色にてあなれど、斧



全樂堂日録

をいれざればかくなるべし。」

「ほつべ」についての記述もあります。

「浜辺下らんとする数丈の谷あり。金屏を折空並べたらん様に黄赤うちまぢりたる中に松の生ひ出る風光言んかたなし。されど甚沢せるきし八幾十丈なるしらす。いとおどろく敷、目もくるめくばかりなり。」

華山は、沢の土を見て驚きます。土というよりも砂で、土の中に隙間があるため、大変もろくなっています。そのため、七日に訪れた大草の海岸と比べ、「凡此浜辺土砂のミにて大草浜より八またひととき八おどろくしく幾十丈なるをしらす。

小松所々に生ひて砂ともに落かさなりて、自ら藪をなすもあり、又落のこりたる八はるか峯めける岨上に残れ（る）もあり」となっています。そして、大雨が降ると土が流れて、畑の中も谷になつてしまったということも聞きます。

浜に降りると、昨日網をかけ鰯が大量にとれたようので、何十里とある浜の砂もみえないほどに、鰯が干してありました。

『田原町史』（以下『町史』）に、明治維新前の太平洋側の漁獲物一覧表が載っていて（中巻二八―ページ）、二月は「大鰯」になっています。また、田原藩にとつて鰯は、「太平洋岸の鰯は漁獲の主なもので、煮干として庶民唯一の「だし料」とされ、煮出しの材料となり、棒手振によつて各家々にも売りさばかれた。豊漁の場合は「ほしか」（干鰯）として肥料にもなった。」（上巻 七六七―七七八ページ）とあります。

華山は、大量の鰯について、「この鰯八子を落さんとて内洋に入るゝものなりとぞ。」と記しています。太平洋側で内洋というもおかしなことです。が、「谷」は、ほつべからの流水や侵蝕が作った入込み（『町史』中巻二一―ページ）のことです。「谷ノ口」というのは遠州灘の入江の深い谷から付けられた地名なので、内洋と表現したのかもしれません。



全樂堂日録

さて、この日の康直の目的は、「君上近侍御連れありて兎網を引わたし」という記述から、兎狩りだったと思われます。

華山は、兎狩りの方法を記しています。網を張った後、林に入り、左右から声を発します。声に驚いた兎は山上に走り登ろうとするのですが、網にかかって身動きができなくなります。そこで、網の所で静かに待っていた人が「各杖をとりて打ころ」します。そして、ほかの場所に移って同じことをします。康直も杖をとって「三捲までありしが、わずかき足ならで八獲ざりしなり。」と

いう結果に終わります。獲った兎をどうしたのか記されていませんが、食用にしたのではないでしょうか。『町史』上巻には「明治末期まではこの地方の食料・食品に大きな変化はないようである。」として、「鹿・猪・兎などの肉類も食料であった。」(七六一ページ)とあります。

この日の夜は、江戸に手紙を出したようです。弟の五郎へも手紙を書いたようです。

華山がこの日記を書いているのは旧暦の二月ですが、「此一兩夜、藪蚊多シ」とあるので、天保四年は暖冬の年であったか、華山が他の虫を藪蚊と勘違いしたと思われます。

### 十二日

前日の兎狩りの獲物でしょうか、「兎を写す。」と、兎の絵をかけた記述があります。そして、「又肉を賜る。」とあるので、兎の肉を食べたと思われる。

江戸時代前半は、生類憐みの令に見られるように、表面上は肉食を禁止していましたが、後半になると、町人を中心に、盛んに肉食が行われていたようです。食肉については、「生活情報シリーズ 食肉の知識」(PDF)、「食肉の知識」で検索するとヒットする( )に、その歴史が詳しく述べられています。

華山は、珍しい物を見たり食べたりすると、感想を記すことが多いのですが、この日の記述は、感想がないので、肉を目にしたり食べたりしたことは華山にとって珍しいことではなかったと推測されます。

午後は、川澄又二郎が来て藩政について話をしたようです。

### 十四日

「稚海藻の点検有之」とだけあり、海藻が何なのか、場所がどこなのかは記されていません。しかし、『町史』中巻に「田原湾に面した浦、吉胡部落では、(略)海藻を対象とした」(二一八ページ)漁労で、「田原湾外に面した波瀬、片浜、白谷、仁崎、馬草など」(同)は明治中期以降、浦や吉胡のような漁法に変わったとあるので、浦か吉胡でしょう。また、海藻とあるので、こんぶかわかめかもしれません。今回の華山の田原行は、田原藩内への海苔の製法の振興で、海藻は海苔と考えられないこともありませんが、今までも海苔の場合は「海苔」と明記していますし、二日後に「乾苔の法を伝ふ」とあるので、海苔ではないと思われる。

研究会員 柴田雅芳 (続)

平成二十一年度華山・史学研究会研修視察  
四州真景―佐原 銚子の旅 後編

二日目(十一月十五日)は、JR佐原駅を、午前八時五分発の電車で、銚子へ向かいました。約五十分で銚子駅へ到着しました。レンタカーにしようという話になり、駅レンタカーを調達して現地調査することになりました。



『四州真景』新町 大手 町奉行やしき

まず、駅から約一キロの距離にある「新町 大手 町奉行やしき」と記された絵のモデルとなった場所を訪ねました。銚子は明治までの百五十年間、高崎藩が領有していました。この町奉行やしきは、高崎藩銚子陣屋を指していると考えられます。現在、その敷地の一部が陣屋公園となっており残っています。ここには、平成十九年に陣屋町史跡公園化実行委員会が設置した記念碑(陣屋史跡メモリアルコア)があり、四州真景の町奉行やしきの絵と、陣屋の平面図、解説文のパネルがはめ込まれていました。なお、これ以外にも旧陣屋跡と刻まれた大きな石碑もありました。



陣屋公園



和田不動からの眺望



『四州真景』和田不動より海を見る

次に、「和田不動より海を見る」と記された絵のモデルとなった場所へ向かいました。和田不動は、銚子市内の植松町市営住宅付近にあります。陣屋公園から約五分で、現地に着きました。市営住宅に隣接して、和田不動があるはずですが、林があるだけで見えません。林の中へ入って行く遊歩道があり、そこを少し下ると、不動堂が現れました。不動堂の前には、海岸方向へ、急傾斜の長い石段が続いています。石段が正面で、裏から入って来てしまったことに気がきました。

四州真景では、和田不動より海を見るとなっていますが、現在では港が造成され、海岸線が後退したのと、木が繁って高くなっているため、海はよく見えません。『利根川図誌』に、銚子磯巡の図があり、和田不動も、海沿いの高台に描かれています。また、「和田不動堂 和田の南、山の上にあります。石階の左右に瀧あり。風景至つてよろし」という文章があります。当時の景勝地の一つとして華山が描いたものであることがわかります。

なお、不動堂がいつのものかは、不明でしたが、灯籠には文化八年（一八一二）の文字があり、華山が訪問した文政八年（一八二五）当時には、既に存在したものであることがわかりました。



銚子港



『四州真景』川口鷓ノ糞石

次に「川口鷓ノ糞石」と記された絵のモデルとなった場所へ向かいました。川口鷓ノ糞石は銚子港にあります。鷓ノ糞石と呼ばれる岩は、利根川河口と銚子港を分断する堤防の先端に現存していますが、最も大きな岩は堤防に取り込まれてしまっています。その他にも、小さな黒い岩が海中からでている様子が見えます。ただ、現在は港の造成により、華山が描いたような景色を見ることはできません。

銚子港には、ポータータワーという高さ約五十メートルのタワーがあります。展望台へ上ると、港のすぐ近くに黒生と呼ばれる場所が確認できます。「穴ヶ崎(メトケハナ)」と記された絵のモデルとなった場所も、銚子港付近にあるはずですがわかりません。もう少しこの辺を探してみようということになり、ポータータワーを降りました。駐車場を出るとすぐ、道の反対側の斜面の上に、女男ヶ鼻御來光陣禮之碑があるのを発見しました。斜面を登って石碑を確認していると、さらにポータータワーのすぐ下あたりに、大きな岩があり、看板らしきものも見えます。岩の前まで行ってみると、銚子市教育委員会が設置した夫婦ヶ鼻の地層という説明の看板がありました。ここが、間違いなくモデルとなった場所であることを、ようやく確認できました。



丸山



『四州真景』クロハエ 小湊

次に黒生と記された絵のモデルとなった場所へ向かいました。銚子港から海岸沿いを少し犬吠埼方向へ行った所にあります。現在も地名が残っているだけでなく、黒々とした大小の岩が海の中に点在しています。華山が「クロハエ 小湊」と記した絵がありますが、ここには、海岸沿いに小山のような岩が描かれています。これは、通称「丸山」と呼ばれる場所を描いたのではないかと思えます。現在の形状は、風化が進み、当時とは形が変わっていますが、華山の絵と似ているように思いました。

黒生付近で昼になったので、木村主事がインターネットで調べた、銚子電鉄終点の外川にある店に行くことになりました。銚子電鉄の線路を何度も横切り、道に迷いながら辿り着きました。店は外川漁港のすぐ前で、特別な観光スポットでもないのに、観光客で満席でした。ふぐをはじめ新鮮な魚料理で、十分満足しました。

昼食を終え、長崎と記された絵のモデルとなった場所へ行きました。海岸沿いを走る道は高い堤防が続いていましたが、それでも何とか堤防の切れ目を探し、海岸へ登ることができました。そこから見る長崎は、小さな岬になっていて、その先に、岩が点々と連続し、海の中に延びていました。岩の形は多少異なりますが、比較的華山の絵の名

残を残していました。

次に犬吠埼へ向かいました。休日ということもあり、大勢の観光客でにぎわっていました。まず、世界灯台百選にも選ばれている、犬吠埼灯台を見学しました。最上部からは、黒生、長崎が見渡せます。灯台の眼下には、黒い大きな岩がいくつも見えます。「伊勢路浦 胎内潜 犬吠埼」と記された絵のモデルはここです。そして、胎内潜は犬吠埼下の大きな岩の一つが海蝕洞穴になったものであると考えます。灯台を下り、少し歩くと、灯台の崖下へ続く遊歩道があります。しかし、遊歩道は崩落し、途中で通行止めになっていました。以前、訪れた時は、胎内潜という岩の、すぐ前まで行くことができました。その時撮った写真が残っています。今では、貴重な資料写真になってしまいました。

犬吠埼で午後三時を回ったので、調査を終了することにし、銚子駅に戻り、レンタカーを返却しました。午後四時三十八分発の特急しおさい十四号に乗車し、帰路につきました。銚子から東京への総武本線のルートは、華山が江戸へ戻る際に、八日市場まで利用した銚子道に沿っています。四州真景の足跡をたどりつつ、この旅を終えることとなりました。

田原市博物館から  
渥美郷土資料館へ  
ご案内

博物館企画展のご案内

一月五日(水)～二月十三日(日)

新春企画展

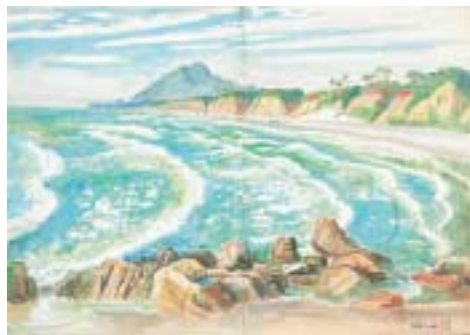
没後五十年

日本の水彩画家〜中田恭一展

中田恭一(一八九五〜一九六〇)は、渥美郡大草村に生まれ、東京で教師をしながら、本郷洋画研究所に入所し、太平洋画会の石井柏亭・石川寅治に絵を学びます。三重県伊賀上野で教員となり、昭和2年の第8回帝展に初入選すると、3年連続で入選しました。のち教員を退職し、埼玉県川口市に移ります。第14回・15回帝展も入選、昭和15年の紀元二六〇〇年記念展覧会(第3回文展)に入選、昭和18年には、紀元二六〇三年全日本水彩画記録画に推奨されました。翌年、大草に戻り、終戦。戦後、生まれ故郷の大草で風景や肖像画を描き続けます。今回の企画展では、「風景」と「人物」をテーマとした画家の魅力を探ります。



「自画像」一九三二年



「高松一色」

当館学芸員による展示解説 1月15日(土)・2月5日(土) いずれも午前11時から

観覧料

企画展

一般四〇〇円  
(二二二〇円)

企画展開催時は小・中学生無料

渥美郷土資料館  
企画展のご案内

十月十六日(土)〜

十一月二十八日(日)

秋の企画展

所蔵品展

華椿系の流れを汲む松林桂月・白井烟嵩・白井青淵や杉浦明平らの作品・資料などを展示。

松林桂月筆幽山孤村図屏風、白井烟嵩筆秋林之図など

当館学芸員による展示解説 11月

7日(日) 午前11時から

松林桂月「山水図屏風」



二月五日(土)〜三月二十一日(月)

企画展

第二十五回ひな祭り展

この展覧会は、江戸から昭和にかけてのひな人形を通じて、その時代や風俗の一端を垣間見ることが目的に開催して、今回で25回目を迎えます。ひな人形は、明治から大正時代にかけて、土人形から男びな、女びなが一対となった衣裳飾りの内裏ひな人形に移り変わり、昭和の前半には、御殿飾りのひな人形が登場し、そして現在の屏風段飾りひな人形へと移ってきました。本展において、様々なひな人形の展観を楽しくご覧いただきますと共に、それぞれの人形が飾られた時代に思いを寄せていただければ幸いです。



「ひな祭り展」(昨年の様子)



企画展のご案内

〓十月十七日(日)

秋の企画展 「挿絵画家 宮川春汀展」(企画展示室)

島村(現在の田原市福江町)出身で挿絵画家として活躍した宮川春汀の作品や明治の文豪たちとの交流を示す資料を展示します。

同時開催：愛知県美術館サテライト展示 川瀬巴水展(企画展示室二)

昭和の広重と称される版画家川瀬巴水の作品を展示します。

渡辺華山と小華(特別展示室)

小華は華山の二男で、華山の弟子、椿椿山に入門し、花鳥画を得意としました。

一月五日(水)〓二月十三日(日)

新春企画展 没後五十年 日本一の水彩画家 中田恭一展

展示解説 一月十五日(土)〓二月五日(土)

同時開催：谷文晁と渡辺華山の山水画 谷文晁筆金碧群仙之図・華山筆高士観瀑図などを展示します。

平常展のご案内

十月二十三日(土)〓十二月二十六日(日) 渡辺華山と弟子たち―椿椿山と福田半香

椿山は花鳥画、半香は山水画の名人として知られています。

没後九十年 岡田虎二郎

岡田虎二郎(一八七二〓一九二〇)は田原に生まれ、全国の偉人を訪ね、様々な思想や哲学を学びました。自らの経験から得た自然の原理を基に、独自の静坐・呼吸法を創案しました。この静坐法は一世を風靡し、皇族・学者・実業家など、1万人を超える人が実践しました。

岡田虎二郎デスマスク、自筆の書などを展示。

プレ展示 没後五十年 日本一の水彩画家 中田恭一展

新春企画展の前のプレ展示で、スケッチなど多彩な作品を展示します。

二月十九日(土)〓三月二十七日(日) 渡辺華山と弟子たち2―山本葉谷と井上竹逸

葉谷は石見国(島根県)津和野藩士、藩の家老多胡逸齋に絵を学び、江戸に上り華山に入門。のち椿椿山の弟子となり、明治6年のウイーン万博にも出品しました。竹逸は旗本の家臣で、17歳頃から華山の家に出入りし、やがて絵を学ぶようになります。華山四天王と呼ばれた弟子、山本葉谷と井上竹逸作品を展示。

ひな人形展

江戸時代、田原の旧家に伝わった御殿飾りひな人形から段飾り雛人形、土人形などを展示。

没後五十年 日本一の水彩画家 中田恭一展

多くの水彩画を残した中田の全貌があらかたに。

常設展示室では渡辺華山の生涯を展示しています。

民俗資料館では田原の暮らしを中心に展示しています。

渥美郷土資料館・赤羽文化会館展示室でも所蔵品を展示しています。

観覧料

秋の企画展 一般六〇〇円 (四八〇円)

新春企画展 一般四〇〇円 (三二〇円)

企画展開催時は小・中学生無料

一般 二一〇円 (一六〇円) 小・中学生 一〇〇円 (八〇円)

(一)内は二十人以上の団体料金

休館 毎週月曜日(祝日の場合はその翌日)、展示替日、十二月二十八日〓一月四日

(財)華山会から

華山・史学研究会会員募集中

申込場所 華山会館事務室 毎月第四土曜日研究会 視察研修(年一回)に参加できます。

田原市博物館友の会会員募集中

入会申込書に年会費千円を添えてお申し込みください。

特典

博物館への無料入館 展覧会・催し物のお知らせ 見学会に参加できます。 博物館だより(年数回)・華山会報をお送りします。

華山会報 第二十五号

平成二十二年十月十一日発行 編集発行 財団法人華山会

理事長 白井孝市

常務理事 菰田稀一

事務局長 彦坂善弘

〒四四一―三四二二

愛知県田原市田原町巴江二二の一

TEL 〇五三―二二一・一七〇〇

FAX 〇五三―二二一・一七〇一

編集・協力

田原市博物館

華山・史学研究会

吉川利明 林 和彦

山田哲夫 別所興一

林 哲志 中村正子

小川金一 柴田雅芳

加藤克己 中神昌秀

増山禎之 磯部奈三子

※華山会報ご希望の方は華山会館・田原市博物館にお申し出ください。次回発行予定 平成二十三年四月一日